
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ
(例) 初《はじ》めて

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号
(例) その時|僕《ぼく》のために

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定
(例) 滝田[# 「滝田」に丸傍点]君

滝田[# 「滝田」に丸傍点]君《くん》に初《はじ》めて会《あ》ったのは夏目[# 「夏目」に丸傍点]先生のお宅《たく》だったであろう。が、生憎《あいにく》その時のことは何も記憶《きおく》に残《のこ》っていない。

滝田[# 「滝田」に丸傍点]君《くん》の初《はじ》めて僕《ぼく》の家へ来たのは僕《ぼく》の大学を出た年の秋《あき》、僕《ぼく》の初《はじ》めて「中央公論《ちゅうおうこうろん》」へ「手巾《はんけち》」という小説《しょうせつ》を書いた時である。滝田[# 「滝田」に丸傍点]君《くん》は僕《ぼく》にその小説《しょうせつ》のことを「ちょっと皮肉《ひにく》なものですな」といった。

それから滝田[# 「滝田」に丸傍点]君《くん》は二ヵ月おきに僕《ぼく》の家へ来るようになった。

或年の春《はる》、僕《ぼく》は原稿の出来ぬことに少《すくな》からず屈託《くつたく》していた。滝田[# 「滝田」に丸傍点]君《くん》はその時|僕《ぼく》のために谷崎潤一郎[# 「谷崎潤一郎」に丸傍点]君《くん》の原稿を示《しめ》し、(それは実際《じっさい》苦心《くしん》の痕の歴々《れきれき》と見える原稿だった。)大いに僕《ぼく》を激励《げきれい》した。僕《ぼく》はこのために勇氣《ゆうき》を得《え》てどうにかこうにか書き上げる事が出来た。

僕《ぼく》の方からはあまり滝田[# 「滝田」に丸傍点]君《くん》を尋《たず》ねていない。いつも年末《ねんまつ》に催《もよお》されるという滝田[# 「滝田」に丸傍点]君《くん》の招宴《しょうえん》にも一度《ど》席末《せきまつ》に列《れつ》しただけである。それは確《たしか》震災《しんさい》の前年、大正十一年の年末《ねんまつ》だったであろう。僕《ぼく》はその夜《よ》田山花袋[# 「田山花袋」に丸傍点]、高島米峰[# 「高島米峰」に丸傍点]、大町桂月[# 「大町桂月」に丸傍点]の諸氏《しよし》に初《はじ》めてお目にかかることが出来た。

僕《ぼく》は又滝田[# 「滝田」に丸傍点]君《くん》の病中《びょうちゅう》にも一度《ど》しか見舞《みま》うことが出来なかった。滝田[# 「滝田」に丸傍点]君《くん》は昔《むかし》夏目[# 「夏目」に丸傍点]先生が「金太郎」とあだ[# 「あだ」に傍点]名した滝田[# 「滝田」に丸傍点]君《くん》とは別人《べつじん》かと思《おも》うほど憔悴《しょうすい》していた。が、僕《ぼく》や僕《ぼく》と一しょに行った室生犀生[# 「室生犀生」に丸傍点]君《くん》に画帖《がじょう》などを示《しめ》し、相変《あいかわ》らず元氣《げんき》に話《はなし》をした。

滝田[# 「滝田」に丸傍点]君《くん》に最後《さいご》に会《あ》ったのは今年の初夏《しょか》、丁度《ちょうど》ドラマ・リーグの見物日《けんぶつび》に新橋《しんばし》演舞場《えんぶじょう》へ行った時である。小康《しょうこう》を得《え》た滝田[# 「滝田」に丸傍点]君《くん》は三人のお嬢《じょう》さんたちと見物《けんぶつ》に来ていた。僕《ぼく》はその顔《かお》を眺《なが》めた時、思《おも》わず「ずいぶんやせましたね」といった。この言葉《ことば》はもちろん滝田[# 「滝田」に丸傍点]君《くん》に不快《ふかい》を与《あた》えたのに違《ちが》いなかった。滝田[# 「滝田」に丸傍点]君《くん》は僕《ぼく》と一しょにいた佐佐木茂索[# 「佐佐木茂索」に丸傍点]君《くん》を顧《かえり》みながら、「芥川[# 「芥川」に丸傍点]さんよりも痩せていますか?」といった。

滝田[# 「滝田」に丸傍点]君《くん》の訃《ふ》に接《せつ》したのは、十月二十七日の夕刻《ゆうこく》である。僕《ぼく》は室生犀生[# 「室生犀生」に丸傍点]君《くん》と一しょに滝田[# 「滝田」に丸傍点]

君《くん》の家へ悔みに行った。滝田〔#「滝田」に丸傍点〕君《くん》は庭《にわ》に面《めん》した座敷《ざしき》に北を枕《まくら》に横《よこ》たわっていた。死顔《しにかお》は前に会《あ》った時より昔の滝田〔#「滝田」に丸傍点〕君《くん》に近いものだった。僕《ぼく》はそのことを奥《おく》さんに話《はな》した。「これは水気が来ておりますから、……綿《わた》を含《ふく》ませたせいもあるのでございましょう。」

奥《おく》さんは僕《ぼく》にこういった。

滝田〔#「滝田」に丸傍点〕君《くん》についてはこの外《ほか》に語《かた》りたいこともない訳《わけ》ではない。しかし匆卒《そうそつ》の間《あいだ》にも語《かた》ることの出来るのはこれだけである。

底本：「大川の水・追憶・本所両国 現代日本のエッセイ」講談社文芸文庫、講談社

1995（平成7）年1月10日第1刷発行

底本の親本：「芥川龍之介全集 第一～九、一二巻」岩波書店

1977（昭和52）年7、9～12月、1978（昭和53）年1～4、7月初版発行

入力：向井樹里

校正：門田裕志

2005年2月20日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。